

歴史と伝統文化の
まち・成田。市内に
は、歴史ある文化財
が多数あります。



吉岡さんがつくった「人丸」の品種登録証



成田の栗

一大産地を目指した先駆者



栗栽培の先駆者
吉岡次男さん

「銀寄」・「岸根」・「丹沢」・「筑波」
これはいったい何の名称でしょうか。
秋の味覚の一つ、栗の品種名です。成
田における栗の栽培は、昭和28・29年
ころ、神奈川県から苗木を導入し、中
郷・八生地区で試植したのが始まりで
した。その中で栗栽培の普及や新品種
の育成に取り組んだ技術者がいました。

大正9年に和田(中郷)に生まれ、千葉県農業改良普及員として活躍した吉岡次男さん(現在84歳)です。

当時、農家の所得は低く比較的栽培が容易で換金性が高い栗に着目し、また、試植の結果も良かったことから印旛支庁成田農業改良普及所と農家は栗栽培の普及に取り組みました。クリタマバチという害虫の発生によって心配された栗栽培も、耐虫性の強い新品種の試作と導入、各地での剪定や植苗の講習会、農業技術研究所の訪問、害虫の調査研究を積み重ね一大産地を目指しました。その一方で、昭和35年の成田市栗組合結成、同40年には市農業協同組合が誕生し出荷体制の確立、翌年には栗選果場が完成するなど栗を取り巻く環境は徐々に整備され、栗組合・市・農協・普及所・生産者が一体となり、最盛期には栽培面積積250ha、取扱高130トンまでに成長しました。しかし、空港や成田ニュータウンの建設で栗畑は減少し、現在の栽培

面積は約1/8となってしまいました。

昭和30年ころから栗の栽培や育成に情熱を注いだ吉岡さん、自宅(小泉)の周りはずべて栗畑として従来の栽培種との比較観察や研究を続けていました。そして昭和60年、新品種「人丸」の誕生となりました。この名前は通称「人丸」と呼ばれる地名に因んで付けられたもの。現在もバスの停留所名(野毛平工業団地入口)になっています。実は粉質で香りが良く非常に艶があり甘みが強いのが特徴です。現在もこれまでの技術を生かし改良や工夫がなされ成田栗は健在です。8月下旬から始まった出荷は今ピークを迎えています。

成田の栗の研究については去年4月発表された『和泉の郷 ふるさと歴史探訪』の中で紹介されています。古文書から現代資料までを丹念に調査・研究した大作です。



栗の剪定作業(「成田市農協20年史」より)



栗の出荷風景(「成田市農協20年史」より)

編集後記

ことしの春、ある人から大室出身の人が小御門神社(下総町)に能面を奉納するとの情報があり、合併先のことであるので取材することに。奉納したのは能面作家の小倉宗衛氏(5ページ参照)。事前に氏の経歴を調べると、「国際的に知

られた日本を代表する能面作家」と分かり当方の勉強不足を反省することに。本号では至って簡単な紹介になってしまいましたが、ぜひ郷土で作品展を開いていただき、多くの市民に「世界の小倉芸術」をご披露願いたいものです。